

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 1 日現在

機関番号：34307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370217

研究課題名(和文) 平安時代における『万葉集』訓読本文の研究 - 人麿集を中心として

研究課題名(英文) A Study Heian Period Shikashu: The Hitomaroshu

研究代表者

朝比奈 英夫 (ASAHINA, Hideo)

京都光華女子大学・キャリア形成学部・教授

研究者番号：50248936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『人麿集』の享受と伝播が和歌文学史の展開に与えた影響を明らかにすることを目的とする。その具体的な方法として、「1、私家集『人麿集』の校本作成」「2、他出文献との校合による『人麿集』の伝播調査」の2点を設定し、研究を遂行した。その結果、『人麿集』が『万葉集』の伝来と密接な関係を保ちつつ、和歌文学の多様な表現を生み出していったことを確認した。研究成果として、著書1点、研究論文3点を公表し、口頭発表を1件行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the post-Heian influence upon Waka poetry of the "Hitomaroshu" (『人麿集』). We shall conduct a detailed investigation into the "Hitomaroshu" and compare it with other documents. As a result of this research, we shall make it concretely clear that "Hitomaroshu" had significant influence on the development of Waka literature. Results of our research include one book, three articles, and one presentation.

研究分野：国文学

キーワード：万葉集 人麿集 私家集 万葉集訓読本文 万葉集の伝来 万葉集の諸本 赤人集

## 1. 研究開始当初の背景

平安時代における『万葉集』の訓読本文については、『万葉集』伝来史の研究及び万葉歌の注釈によって、これまでに究明されたところは少なくない。しかしながら、平安時代における文献、特に私家集や歌学書などとの厳密な比較検討は、いまだ十分ではない。そこで本研究は、平安朝に成立した私家集『人麿集』に着目する。当該私家集は、柿本人麻呂の家集として編纂された歌集で、「人麿集」「柿本集」など種々の名称があり、また伝本は、大きく五類、さらに第一類本は三系等に分類ができる。それぞれの系統の成立はいまだ明確ではないところが多いが、これまでの研究によって、おおよそ『拾遺集』成立以降に伝承された人麿歌に、『万葉集』、『古今和歌六帖』、『拾遺集』等を参考資料として第一類系統の原型が作られ、それに『万葉集』歌を補充する形で、第二類本、第三類本が順次作成されたことが明らかになっている。また、第四・五類本は、第一類本とかなり近似した性格を持つので、第一類本から派生したものととも考えられるが、成立に関しては、十分な究明が行われていない。これらの五系統の主たる伝本として、冷泉家時雨亭叢書や大東急記念文庫本が紹介され、そのほとんどが鎌倉期の写本にまで遡ることが明らかになっている。

以下、当該歌集の本文系統について、本研究の成果と関わる事項について略述しておく。第一類本の第一系統は、書陵部蔵本(五〇一・二)などで、散佚前西本願寺本三十六人集系統の本文で、上下二巻からなる。本文は平安期のものが残されていると考えられる。その上巻は最も早く成立したと考えられる歌群で63首、さらに下巻として178首が付加され、全241首。第二系統は、第一系統の本文に、藤原輔相の作と考えられる「国名隠題歌」を付加した形態で、書陵部蔵本(五〇六・八)などの流布本系統である。これが歌仙家集本などの本文で歌数は伝本によって多少の差異があるがほぼ300首。冷泉家時雨亭文庫清誉本「人麿集」もこの系統に含まれるが、やや歌数や本文に相違が見られ、301首が収録される。第三系統は、冷泉家時雨亭文庫枅形本「柿本家集」系統で、歌数は180首。第二類本は書陵部蔵(五〇一・四七)本、所謂群書類従本の系統で、第一類本に万葉歌を補充し、和歌を部類別に収録したもので、「国名隠題歌」を巻末に付した644首。第三類本は、時雨亭文庫素寂本「柿本人麿集」の系統で、766首。これは、第一・二類本を参考にして万葉歌をさらに補充し、第二類本と同様、部類別に集成したものである。第三類本は、歌頭に「十」などと万葉集収載巻名を記しているのが特徴である。第四類本は、時雨亭文庫定家様本「人丸集」で、296首。第五類本は、大東急記念文庫「人丸集」で、145首である。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究は、その目的を平安時代の『万葉集』訓読本文を考究するところに置く。本研究の特色は、『万葉集』の伝本及び本文研究の成果と平安朝の和歌研究の成果とを十分に踏まえて研究を行うこと、私家集等のみならず、平安朝以降の万葉歌所載文献までも調査対象として本文の様態を精査すること、の2点にある。これによって、『万葉集』訓読本文の実態について広範かつ精緻な調査を行い、万葉歌が伝播していく中で『人麿集』所載歌がどのような位置を占めるのか、それが平安朝以降の和歌史の展開においてどのように位置づけられ評価されるのかを解明することを目指すものである。この目的を達成するためには、上記1で述べた五系統の『人麿集』中の『万葉集』歌の和歌本文をすべて調査・比較して、平安時代における『万葉集』訓読本文について、享受と伝播の実態を探っていくことが必要である。

## 3. 研究の方法

上記1の冒頭に述べたとおり、平安時代における『万葉集』の訓読本文と、平安時代における文献、特に私家集や歌学書などとの厳密な比較検討は、いまだ十分ではない。そこで、本研究は、『人麿集』を中心に据えるという方法によって平安期の『万葉集』訓読本文の精査を行い、鎌倉時代以前の、換言すれば仙覚の校訂作業以前の『万葉集』本文と訓読本文の実態を探る。具体的には、下記のとおりの方法を取った。

研究方針として「1、私家集『人麿集』の校本作成」「2、他出文献との校合による『人麿集』の伝播調査」の2点を設定し研究を開始した。これらと並行して『萬葉集』との対校、『人麿集』の先行研究に関する目録作成も進めた。研究の進行に伴い、『人麿集』のより精緻な実態解明のために、三類本(素寂本)と『万葉集』の次点本に属する類聚古集、廣瀬本との対校表を作成した。非万葉歌にも万葉時代の歌語と見なすべき例が散見するため、非万葉歌についても対校表の作成を開始した。これらとは別に、未確認諸本の調査として、国立歴史民俗博物館蔵、茨城県立歴史館本について調査した。

## 4. 研究成果

(1)既に上記1から3で述べたとおり、『人麿集』の伝本には複数の系統があり、しかも系統毎に歌数・排列の相違が著しい。そのため『人麿集』という大きな枠組みでこの歌集の性格を論じることは難しく、また効果も乏しい。とりわけ『万葉集』との関係を考える場合には、それぞれの系統の、個々の伝本に即して、『人麿集』の本文と、『万葉集』の本文・附訓とを対照する必要がある。

本研究では如上の点を鑑み、三類本を対象とした。三類本は早く後藤利雄『人麿の歌集

とその成立』(至文堂、1961)で「異本人麿集」として紹介された系統である。後藤の紹介した伝本は近世の写本であったが、近時『冷泉家時雨亭叢書』72巻(朝日新聞社、2004)に、その親本にあたる鎌倉時代写の義空本が収載され、古写本に依ることが可能となった。当該論文では、この義空本の本文を検討し、『万葉集』との関係の一端を明らかにしようと試みた。

三類本は766首で、『人麿集』各系統の中でもっとも歌数の多い本である。しかもそのうち643首を万葉歌が占めており、その位置付けが問題となる。所収万葉歌については、三類本に先行して成立していたとおぼしき一類本・二類本と共通する歌もあるが、その割合は以下のとおり決して多くない。

- 一～三類本重載歌 94首
- 一・三類本重載歌 113首
- 二・三類本重載歌 195首

+ から を引いた数が実質的な他系統所収歌であるので、総数は214首。三類本所収万葉歌の3分の1に過ぎない。三類本が一・二類本を踏まえて編集されたことを疑う必要はないが、大部分の万葉歌は別口から採取されたと考えられる。

それでは、どのような資料から採取されたのかといえば、『古今和歌六帖』のような仮名万葉文献ではなく、『万葉集』そのものからと考えるのが妥当なようである。たとえば冒頭部に『万葉集』巻十の前半(新編国歌大観番号の1800番代)の歌が偏在している点などに顕著であるが、『万葉集』以外の文献を経由して、孫引き的に採取されたと考えると、排列に不自然な点が多い。三類本編者は、『万葉集』から直接歌を引いたと認められる。

さらに注目すべきは、一～三類本以外の他系統所収の万葉歌の本文である。一・二類本と、三類本の当該本文を対照すると、歌詞に相違が少なくない。それ自体は複雑な書写過程を経ることの多い私家集にとって常のことであるが、三類本万葉歌の特徴として、「一・二類本よりも、平安時代書写の『万葉集』伝本(次点本)の附訓と一致する本文が多い」という点が指摘できる。

三類本の成立は種々の徴証から推して、平安時代末期かそれを下った頃と考えられるが、上の徴証は、同本がこの時代に流布していた『万葉集』の伝本を実見し、一・二類本の本文を訂正する場合のあったことを示唆する。三類本は、この時代の『万葉集』の伝来と、当時の附訓(とそこから推測可能な本文)の復元を考えるうえで、極めて重要な資料であるといえる(以上は雑誌論文1に該当)。

(2) 繰り返しとなるが、『人麿集』の伝本系統は多岐にわたっている。しかも、たとえば系統中もっとも大部な三類本(766首)と、もっとも収載歌の少ない五類本(145首)を対照した場合、三類本の一部を抜き出したリ、圧縮したりすれば五類本の排列と一致す

るわけでもない。それぞれ独自の排列となっており、本文の相違も多々ある。

もちろん、山崎節子「人麿家集の成立と拾遺集」(『中古文学』第24号、1979)同「人麿集諸本の成立」(『國語國文』第50巻第8号・1981)や、藤田洋治「人麿集」(『和歌文学大辞典』古典ライブラリー、2014)などが指摘するとおり、部分的に排列の近似する箇所はある。また一類本第二系統と二類本に共通して存する「国名隠題歌」からも、系統をまたがったの参照関係が存在したことも疑いない。

その一方で、各系統に独自に存在する万葉歌も多く、また共通歌であっても、排列が相違しており、単純に書承関係を認めてしまっただけのよいのか、疑問に感じることも少なくない。加えて、各系統の相当数を万葉歌が占めるわけだが、その採取基準や排列意識のようなものに関しても、不明な点が多い。こういった疑問点を解消するための足掛かりとして、まずは各系統にどれだけの万葉歌が収載されているのかを明確にする必要がある。

本研究では、この基礎的事項を明らかにするため、『万葉集』の番号を基準とし、その万葉歌がどの系統の『人麿集』のどこに収められているのかを、番号対照表という形で明示した。合わせて、平安時代における『万葉集』の伝来と万葉歌の流布を知るために参考資料として、『後撰和歌集』、『拾遺抄』、『拾遺和歌集』、『赤人集』(1類本)、『家持集』(1類本)、『古今和歌六帖』の所収万葉歌の有無についても明示した。

また、本研究には五類本(大東急記念文庫蔵「人丸集」)の翻刻を併載した。当該「人丸集」は真観筆本を鎌倉時代に転写した由来ある古写本であること、従来系統と相違する独自の本文を持つことが、新藤協三「解題」(『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇6和歌』、汲古書院、2008)によって明らかにされている。しかし、その重要性に比して、上掲書に影印こそ収められているものの、『新編私家集大成』(エムワイ企画、2008)やそれを継承する「和歌&俳諧ライブラリー」(古典ライブラリー)にも翻刻されておらず、本文の利用が難しい状態にあった。そこで本研究では奥書なども含め、その全文を翻刻することとした。

真観と『人麿集』といえば、義空本(三類本)の書写者である日孝は、真観周辺の人物であることが指摘されている(久保田淳「家隆集の諸本とその伝来について」、『藤原家隆集とその研究』三弥井書店、1968)。すると、真観は『人麿集』の書写、ひいては仙覚本が流布する以前の『万葉集』の伝来に大きな影響力を持った人物と認めてよい。五類本の翻刻は、真観の『万葉集』受容を考えるうえでも、重要な資料になると考えられる。(以上は図書3に該当)

(3) 以上のような研究を遂行する一方で、鶴岡市郷土資料館蔵『萬葉集柿本朝臣人麻呂歌』、同『萬葉集山部赤人歌』という伝本の調査を行い、その成果を論文2「近世期の人麻呂・赤人受容の一面 鶴岡市郷土資料館蔵の二歌集について」(『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第五三号)として発表した。近世後期の庄内藩では、和歌文学が隆盛し、和歌を学ぶだけでなく、注釈にも及んでいる。国学者鈴木重胤が何度か訪れ、国学を教授し、多くの人々が講義を受けていたことが知られている。そのような風土の中で作成されたと考えられるのがこれら二つの歌集である。本文は、精査したところ、加藤千蔭『万葉集略解』の本文に一致するところが多く、『略解』を利用したものと思われる。ただし、人麻呂・赤人の万葉集歌を抽出したものであるが、『略解』から直接引用したものではなく、一旦『略解』の訓を抜き出した『萬葉集』抄出本があり、そこから人麻呂、赤人の和歌を抽出したものと考えられる。それは、『略解』と相違する本文で、『萬葉集』の表記を勘案すれば出てくるはずのない誤写(例えば巻二199番歌「弓取持之」を「ゆみとりわたし」としている)と考えられる本文が見られること、赤人歌3番歌の長歌の後に「反歌」の下に「右壱首高橋蟲麻呂哥コ、ニ出ス」とあること、などによる。資料としての価値は小さいようであるが、既発表の研究成果「近世期の人麻呂・赤人の一面 - 河野美術館蔵『柿本朝臣・山部宿禰歌集』について -」(『東京成徳短期大学紀要』第46号、平成24年3月)において触れたように、柿本人麻呂・山部赤人の二歌人を採り上げていること自体が『古今集』序の影響下にあり、三十六人集の柿本集『赤人集』が『萬葉集』を反映していないことを批判的に捉えて、より正確な歌人像を把握するために作成されたものと思われる。かような意味で、伝統的な歌人尊崇の意識と最新の万葉学との接点に立って作成された極めて不安定なものとも見るべきであり、伝統的な和歌観を捨て切れていないままに新たに編集されたものと推察される。結果的に不思議な歌集と言わざるを得ないが、このような過程を経て、やがて近代の万葉研究へとつながってゆく一段階の歌集と言えるのではなかろうか。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1, 「三類本『人麿集』の萬葉歌 - 次点本的性格をめぐって -」, 池原陽斉, 『上代文学』第117号、60頁~74頁、査読有り、2016年11月

2, 「近世期の人麻呂・赤人受容の一端 - 鶴岡市郷土資料館蔵の二歌集について -」,

朝比奈英夫・藤田洋治・池原陽斉)、『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第53号、査読無し、1~16頁、2015年12月

〔学会発表〕(計1件)

1, 「『人麿集』の萬葉歌 - 第三系統の採録歌を中心に -」, 池原陽斉, 上代文学会平成27年度秋季大会、2015年11月15日、早稲田大学

〔図書〕(計3件)

1, 『萬葉集訓読の資料と方法』, 池原陽斉、笠間書院、全383頁、2016年12月

2, 『萬葉写本学入門 - 上代文学研究法セミナー』, 小川靖彦編著、池原陽斉他、笠間書院、全112頁、2016年5月

3, 「『萬葉集』及び『人麿集』五系統歌番号対校表 - 附・大東急記念文庫蔵「人丸集」翻刻 -」, 池原陽斉・藤田洋治・朝比奈英夫, 『古代中世文学論考』第34集、(新典社)、査読無し、33頁~98頁、2017年5月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

朝比奈 英夫 (ASAHINA, Hideo)

京都光華女子大学・キャリア形成学部・教授  
研究者番号: 50248936

(2) 研究分担者

藤田 洋治 (FUJITA, Youji)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号: 60165397

池原 陽斉 (IKEHARA, Akiyoshi)

東洋大学・人間科学総合研究所・研究員

研究者番号: 70722859

(3) 連携研究者

( )

研究者番号:

(4) 研究協力者

( )